

砂町水再生センター界隈の今昔 再び

今回は、かつて本欄（平成二四年三月号）で取上げたことのある砂町水再生センター界隈を再び訪れての、広報用に撮影されたこの界隈の航空写真から読み取られた情報と地元の古老からの聞き書きとをない混ぜた「今昔」となりました。

処理施設の呼称は時代によって、汚水処分場、下水処理場、処理場、水処理センター、水再生センターなどと変わってきていますが、煩雑ですのでここでは単に「水再生センター」と云うことにします。

砂町水再生センターの略史

砂町水再生センターは、昭和五年に開設された東京都二番目に古い下水処理施設です。もともと当初はポンプ施設だけの仮処分放流であり、まがりなりにも沈殿処理に移行したのは昭和一七年になってからです。

活性汚泥法をわが国に初めて紹介したのは草間偉さんです。東京大学の先生で大正七年に欧米に留学し一〇年に帰国し、さっそく、その年の土木学会で見聞してきた活性汚泥法について報告しています。これを受け、東京市では活性汚泥法の曝気方式の、機械式曝気と散気式曝気との、性能比較実験を三河島水再生センターにおいて昭和二年から始めています。大正一一年から運転を開始していた三河島は当時、散水濾床法で下水を処理していました。ちなみに、機械式曝気法には、水車が廻っているようなパドル式と羽根が水平に廻るシンプレックス式とがあります。

結局、この三つの曝気法の全てを実施施設として建設することとなり、パドル式は三河島において昭和九年から、シンプレックス式は昭和一四年から芝浦で、それぞれ運転を始めています。

ところが、このとき砂町に導入することになっていた散気式の運転は、戦後もだいたい経った昭和三五年にまでずれ込んでしまいました。

汚泥の消化と機械脱水が昭和三七年に、続いて昭和四五年には汚泥焼却が設置されました。

加えて一時期、この敷地内に尿尿消化槽と尿尿汚泥乾燥床とが立地（昭和二八〇五七年）していたことがあり、その消化脱離液は下水処理施設で処理

されてきました。

さらに平成九年からは、汚泥の集約処理の拠点の一つである東部スラッジプラントが併設されています。

昭和二八年の航空写真

写真・1は、砂町水再生センター界隈の昭和二八年の航空写真です。この写真に番号をふり、東京都下水道局の資料ならびに何人かのOBの方々から伺った話に基づいて解説を付けてみました。

①は事務所です。瓦屋根の木造平屋建で、場長以下七〇八人が事務を執っていました。

②は主ポンプ棟です。昭和六二年に運転停止になるまでの五七年間、下水を揚水し続けました。昭和二四年に来襲したキティ台風の高潮により、中段にまで浸水し揚水機能が一時麻痺しました。事務所や公舎の建物も壊れ、家財道具が流出するなど大きな被害を受けました。

③は第一沈殿池です。昭和一七年から運転を始めています。形は円形です。昭和三五年までの一八年間、沈殿処理の時代が続きました。

汚泥乾燥床（⑤）ができるまでは、沈殿汚泥は着船場（⑦）に横付けになった汚泥運搬船に積んで海に投棄していました。



写真 - 1 昭和 28 年の砂町水再生センター界隈

④は汚泥ポンプ室です。第一沈殿池に沈殿した汚泥を引抜くポンプが設置されていました。

⑤は汚泥乾燥床です。昭和二四年にできました。戦後の化学肥料不足の折でもあり、天日で乾燥した下水汚泥を細かく砕いて、有機肥料として近郊の農家に売却していました。

⑥は貯水池です。活性汚泥処理施設ができるまで（木場系の第一沈殿池、エアレーションタンク、第二沈殿池の稼動は昭和三五年）は、未処理水あるいは沈殿処理水をこの池に貯めておき、東京湾が満潮になった頃を見はからって放流していました。海水により効果的な希釈を図り、その後に来る引き潮に乗せて、沖合に拡散・流出させていました。

⑧は尿尿を送るポンプ室、⑨は尿尿消化槽、⑩は円筒型のガスタンク、⑪はボイラー室です。

昭和二四年に清掃担当部局の委託を受けて、ここ砂町に尿尿処理施設を下水道担当部局が建設・維持管理することになりました。尿尿処理施設の運転は、昭和二八年から五七年までの二九年間にわたっています。

消化槽に汲取り尿尿を投入し、微生物の働きで嫌氣的に処理する方法です。ボイラーで消化槽を加温していました。ガスタンクはこのとき発生したメタンガスを貯めるためのもので、ボイラーの熱源にしました。

消化ガスに含まれているイオウ分は脱硫装置で除去していましたが、これはマッチの発火剤として有効利用されました。

尿尿処理施設ができてからは、汲取った尿尿をここまで輸送する尿尿運搬船が毎日、着船場に出入りするようになりました。

尿尿処理の過程で発生した汚泥も、汚泥乾燥床で天日乾燥し、商品名「みやこ有機肥料」として袋詰めにして、近くの小名木川駅から全国に出荷していました。この、「みやこ有機肥料」を作る作業や販売を含めた運営は、民間会社に委託していました。

⑫は機械工作場で、旋盤・溶接機などの工作機械が置かれ、工作に必要な各種材料の倉庫も兼ねていました。

⑬は鉄筋二階建の公舎です。当時は職務公舎であり、豪雨時には緊急出動が義務付けられていました。

⑮は貯木場の周りの防波堤、⑯は筏を止めるための杭です。原木は筏に組まれてこのような杭に止めて貯木していました。

砂町の地先の海は遠浅で波が静かで河川水が適度に混ざるため、明治時代から浅草海苔の養殖が盛んになりました。海苔場は新砂の水門近くの沖にあり、柵で区切られていました。柵と柵の間にはべカ船の通路が設けられていました。昭和三〇年代の半ば頃まで、海苔干しの風景がみられました。

⑯の辺りは、昭和の初めまで美しい

砂浜でした。春はアサリやハマグリなどの潮干狩り、夏は海水浴場として賑わったところです。さらに沖合に夢の島を望むことができました。現在、夢の島には清掃工場が建っています。

⑰は、秋になるとハゼの釣船で賑わったところです。護岸には天然のカキがびっしりとはりついていたそうですし、また、専用道路（⑭）の両側の海や着船場付近には、セイゴやボラが群をなして泳いでいました。

当時の職員は砂町水再生センターへの唯一のルートであった専用道路を通っていました。風の強い時は波をともに被ったそうです。

⑳は運河にかかる橋です。隅田川にまで通じていた運河に架かっていました。現在、この部分

の運河は埋め立てられ、橋も撤去されましたが、当時の護岸の天端部分が道路脇に残っています。

②は製鋼工場です。この工場のほかに



写真 - 3 小名木川駅
(江東歳時記)



写真 - 2 昭和初期の隅田川沿岸の工場地帯
(江東ふるさと文庫)

たくさんさんの工場の煙突が林立しています。川や縦横に張りめぐらされた運河による水運の利便性、さらには荒川放水路（現在は荒川と呼んでいる）の開削により洪水の心配が軽減されたことが、この地域を工業地帯にしたと考えられます。

②は戦災後の応急簡易住宅です。ここには約八〇戸の住宅がありました。昭和二十四年のキティ台風の高潮によって八分通り出来上がっていたものがバラバラに壊れ、流木となってしまった後、再建されたものです。

③は、かつて金魚の養殖池がたくさんあったところです。ここら辺りの井戸水は塩分や鉄分が多くて飲み水には適していませんでしたが、金魚の養殖には病気の予防や鮮やかな色が出るなどのメリットがありました。

江東ふるさと文庫

写真・1の航空写真に見える砂町水再生センター周辺の街の生活実態や風物に関連する、地元の古老たちの生の声を『江東ふるさと文庫』（江東区、昭和六二年から順次刊行）から引用して紹介します。

なおこの文庫は、明治に江東区内で生まれ大正・昭和を江東区で生活した二六〇余名の方々の体験を昭和五九年から六〇年にかけて聞き取り、文章にまとめたもので六巻からなります。文章化に当たっては、一人ひとりの語り口をできるだけ生かす方向で行なっています。いわゆる江戸っ子のべらんめえ口調が再現されています。



写真 - 4 金魚の選別
(江東歳時記)

水屋の話

砂町辺りの井戸水は海水が浸入してくるため飲用には適さなかったため、江戸の昔から水屋が売って歩く水に頼って生活していました。大正一年から水屋の商売に入ったと云う方の思い出話です。

『そのころ、砂村は水が飲めないんですよ。二尺掘るってえと、もう水がでたんですよ。飲めもしなきゃ、洗濯もできないです。洗濯やってそのまま干すと、全部赤くなっちゃうんです。

そのために、水道の水っていうのは、みんなわたしたちが扇橋まで船で汲みにいくんです。扇橋のもとに水道の元があったんです。それを汲んできて、その水を二つの桶へ入れて天秤でかついで、各家庭へもって回ったんです。一つの桶に一斗入り、二斗で一荷っていうんです。各家庭ではこれをお茶に使い、ご飯を炊くわけです。洗濯の仕上げ水にも使って生活していたわけなんです。井戸水っていうのは、絶対に飲めなかったから。

船はね、伝馬船っていうんですね、昔の。船は水が一〇メートル入るんですよ。一メートル七銭で、一〇メートルだから七〇銭で買ってくるわけです。大正一年でね。それを一荷七銭で売るわけです。

とにかく、砂町、大島、亀戸、平井と、今の江戸川や江東、南葛飾なんか、水っていうものが飲めなかったんだからね。そのために、みんな水を買って飲んでたわけです。お茶もご飯も、味噌汁もだから、とにかく、水の使用量は多いわけです。

それで、一日も休みはないんですから。正月元旦だろうがね、お盆の休みだろうが、昔はお盆の一五、一六日は休みだったんですがね、年がら年中、一日も休みなし。

うちの方は六人しかいなかったんです。親方が一人で。そして区域ごとに、決まってましてね、わたしらの受け持ちは、本砂の八衛門って所でした。水屋全部では、船数にして、



写真 - 5 当時の必需品であった水かめ
(江東ふるさと文庫)

そうですね、一〇〇隻あったか、なしかですよ。
わたしらの給料ってのは、一か月で七円五〇銭。これは、まあ、大工、左官屋よりはよかったですよ。』

筏師の話

一六歳から昭和五七年まで木場で筏師をしていた明治四〇年生まれの方の話です。

『わたしの親方は、木場でも一番大きかったんです。だから若い衆も二〇人ぐらいいてね。大体三年年季。三年たつと一人前の給料払う。

千住の方へいくつて時はね、(冬場は、)前の日の夕方、筏の上にね、昔はみんな炭たいてたでしょ、どこでも。筏の一番後ろの所へ用意しとくの。前の方へ持つてきちゃうと、先がみえなくなっちゃうからね。だから後ろへ置いてね。これでいよいよ隅田川へでるでしょ、隅田川へたらば今度はもう、流しいいんだからね。だから、火たくのよ。寒いですよ。今の寒さなんて問題じゃないんだよ。棹をズブズブツてやるでしょう、そうするとぬれるでしょう。もうこれが、ツルツルツルツて、氷になるのよ。ここへ手をやると、サラサラ、サラサラと氷が。それナメっていうの。「ゆうべは寒かったよ、棹、ナメになったよ」って。

隅田川なんて、こんな短い竹竿だけじゃ駄目だから。深いからね。長い棹持つてかなきや駄目でしょ、今みたいに、蒸気でトントコトンと引つ張つてくんじやないからね。自分でやつてくんだから。二五尺くらいの棹、持つてくからね。吾妻橋(台東区の浅草雷門の近く)の真ん中くらいへいくと、二八尺くらいの棹でもないんだからね。だから、浅い所、浅い所、あっちへいたりこっちへいたりするんだよ。浅い所知ってるから、みんな。浅い所よっていかないと棹がでない。

仕事着は半纏だね、半纏で、メリヤスのシャツ一枚着てれば、もう上等だね。腹掛け着てさ、半纏着て。シャツ着るようになればもう、兄い株。小僧のうちはシャツ着てないもの、冬でも。

二〇人いてもね、給料がみんな五銭ぐらいずつ違ったもんだよ。技術だからね。だから本当に競争なのよ。のんびりしていたら、いつまでたっても同じでね。

筏は特殊な結び方があるのね。ほどく時、簡単にほどけてね。でも波の中でどんなにもまれても、それではほどけない。その縄をあとでまた使うんだから。親方は縄を年中買ったら大変でしょ、いちいち捨てちゃ。だから、縄は儉約しなきゃならない。縄をどれだけにしてやるかっていうのをみるわけね。

冬場はね、夜じやなきや駄目なの。流れが昼間は遅いの。永代橋(江東区永代通り)からでて千住へいくのに、途中で満潮になっちゃうの。そうすると水が止まって、今度は引っ返しちゃうでしょ、だから途中へ置いてこなきゃならない。またあしたいかなきやなんないから。：それで、夜中にいつて朝帰ってくる。いつてくると三日分くらいになるの。一日二円の手間の人さ、六円くらいもらえるわけね。お休みつてのは、一日、一五日ね。これは厄日なの。』



写真-6 筏を流す
(江東ふるさと文庫)



図-1 筏を動かす
(江東ふるさと文庫)

海苔養殖の話

秋の彼岸過ぎになると、海苔の胞子を植え付けたヒビと呼ばれる竹や木の棒を柵の中になたてて育て、一月中旬から翌年の三月下旬くらいにかけて収穫しました。

深川沖の三番お台場近くで海苔養殖をしていた方の話です。

『海苔は冬だけですからね、後はアサリとつたり、それからカキね、ああいうものとするくらい、貝類を。それから魚。海苔の合間にね。たいがいは海苔なんだよ。海苔だけつかやらない人もあんだよ。まめな人はね、やるけど。』

海苔はね、つまり養殖するんだよ。竹を立てて。それを干潮の時とつてくんだよ。そしてあしたの朝早く起きて、夜中だわね、一時か二時ごろ、早い時起きて、それを朝までに四角な、あるでしょ、薄い、紙みたいになってる、あれにしちゃうんですよ。

（採ってきた海苔は叩き台にあげ、包丁で叩いて細かく刻んで真水に浸し、それを五合枘ですくって海苔簀（のりす）にあける。）

そしてそいつを朝になって表に干して、天日で乾かすんだよ。半日ぐらい干すと乾いちやうから、天氣が良ければ。悪いと乾かないからね。今度は乾燥機で乾かすんだよ。石炭たいてね、扇風機回して。それで、仲買人の人へ卸したんだよ、一帖いくらで。

日本橋の山本、海苔店の中ではねえ、一番でかいんだよ。あとね、仲買人がたくさんいるんだよ、あの、京橋の「くぼ仁」だとかね、今あるかどうか知らねえけども。

大きいとこはね、みんな買いにきたんですよ。値をつけていくんですよ、紙に書いて…。箱へ入れとくんですよ、ずっと。大勢くるでしょ、その中の、一番高値の人に売るわけですよ。

豊洲とか晴海ね、それから有明町、あすこらみんな海苔の場所だったんだよ。オリンピックが境でね、あの海がね、買い上げになっちゃったんだよ。あの、あれが、埋め立てができるんで。だからやめちゃった。

昔はこのね、相生橋から外は海だったんだから。大正時代は相生橋から

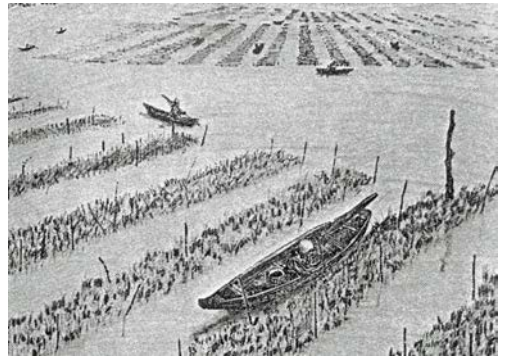


写真 - 7 海苔を採る
(江東ふるさと文庫)

外はね、海。ですからね、海苔の場所は、今の豊洲の下が一番浅かった所なんだよ。豊洲。ええ、あれから有明町。一番終わりだね、一番外つかわなんだよ有明町が…。

（海苔場を買い上げられたあとは）まあいろんな、釣り船にいたり、ウナギとつたり、まあそんなことやったんだよ。魚とつたり。もう海苔はとれないから、内職だ。それも五、六年だよ、やったのは。あとはもう、やめちゃったから。都庁で漁業権が買い上げになったからねえ、もう魚もとることできなくなっちゃったんだよ。船まで買い上げられちゃったからね。』

船宿の話

江東区古石場で船宿を営んでいた方からの聞き書きです。

『昔はね、ベカ船といってね、小さい貸し船が多かったんですよ。一日二〇銭か、一五銭くらいじゃなかったかな…一日貸してね。エサは別です。一日のエサ代、一本一銭五厘くらいでした。』

「仕立ってくれ」っていえば、船長がでていていたわけですよ、五、六人乗れるような船でね。それは艀（はたけ）ででいたわけですよ。四、五月ころから船を川に付けて…。お客さんきますから。

ベカがなくなつたのは、大正六年が津波だから、それから七、八年たつてから、だんだん少なくなつたんでしょう。震災の時は、ほとんどまだありました。震災になったらもう全然、その小さい船っていうのはなくなつたね。

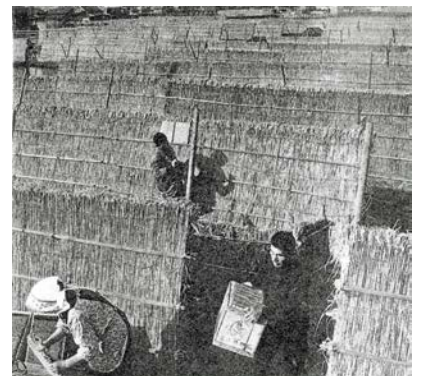


写真 - 8 海苔を干す
(江東歳時記)

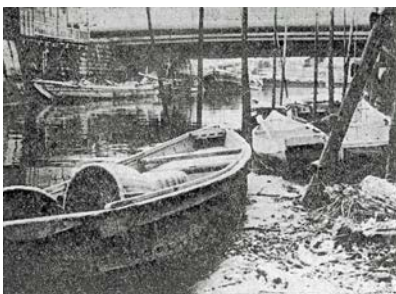


写真 - 9 ベカ船
(江東ふるさと文庫)

今はもう、船が大きくなってるでしょ、だから釣りにいってたって、一時間で木更津までいっちゃうでしょ。

スズキの小さいフッコっていうやつね、あれとボラとクロダイです。クロダイも大きいたって限りがありますからね。ええ、カイズ

ってやつですね。それねらいに、ま、夏から秋、冬はキス。脚立釣りというのがあって、あれがひとつきりはやりましたね。大正時代はね。戦後はだんだん下火になっちゃってね。ええ、あれどうしたんだかね、シロギスはんといまですけど、アオギスという脚立で釣るキスはいないですね。昔はね、アオギスはでればすぐね、砂町沖から葛西沖でね。

終戦後間もなく、天ぷら仕立てをやりはじめてね。ただ釣りだけじゃしょうがないって、食事を。それまではね、投網だけで天ぷらをやっていたんです。投網船は、とった魚を天ぷらに揚げて食べさせていたんです。投網の天ぷら船は明治時代からあったんですよ。それで、投網はとれなくなって、ハゼ釣りよくなったでしょ、そいでほら、まあハゼの釣りたてを天ぷらというんだけど、釣りだけじゃ間に合わない。しょうがねえから、新鮮なやつを河岸から買ってきて自分とこでこさえて、持ってって揚げるようになって…。うん、お客さまを招待する人が多いですね。』

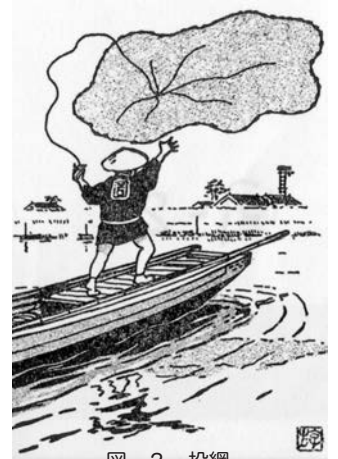


図 - 2 投網
(江東ふるさと文庫)

どぶの話

下水と云えばほとんどが雨水排水のことでした。江戸時代から続いている、下水路の水門を開閉する人がいました。

『亀戸、五之橋から進開橋までの五乃橋通りは、昔は狭かったねえ。片側はどぶですよ。進開橋のところに水門があつて、係がいてね。引き潮になると、水門あけて中の水をダァーッと引き出す。潮が上がってくると、閉

めて。どこの細い道入っても、道の片側にならず水路があつたんです。』

『近くに、熊の入といって熊野神社をまつっておった水門がございまして、満潮のときは水門を閉めまして、干潮になると水門を開けるんです。それで、大雨の後は水を全部はかせるのに、一か月半くらいかかりましたかな。』

震災後の街づくりの話

『深川は徳川時代から開けていたから、わりに下水道は出来ていた。満潮、干潮って、満潮になりますとね、下水からね、ポコポコポコポコ、水が出てくるわけ。下水から、一メートルじゃないけど、五〇センチぐらいはね、電車がチンチン走ってるでしょ、五〇センチになると止まるわな。三〇センチまでは走るんですよ。水けむりをたてて走るんだよ。』

毎月、旧の一〇日ごろから一七日ぐらいまで、大体上げ潮になっていて、一週間ぐらいはね、満潮の、その時間があるんだよ。例えば一二時、そのあくる日は、今度はちよつとさがって、一時に満潮とか…。そうすると電車が水しぶきを上げてね、それに雨なんか加わると今度、電車が通れなくなる。そういう具合に、深川の地区は地盤が低かった。』

砂町水再生センターは昭和五年の稼働ですから、本格的な下水管はまだ建設の途上です。

水洗化の話

『大正一二年、私が五年生のとき関東大震災ですね。そのあと、変わりましたね。』

震災後、浄化槽がね、出来ましたよ。ここが一番早かったんじゃないですか、水洗が。それから、道が碁盤の目になりましたよ。まっすぐに。で、抜けれない道つてのがなくなりましたよ。私道のおもてには、必ずね、「この道抜けられます」って書いてあるんですよ。ええ、それでないところはね、

抜けられないです。突き当たりになっちやうんです。』
 ここで云う浄化槽というのは水槽便所と呼ばれたもの（簡便な浄化機能を有しており、浄化槽のルーツと云えるもの）ではないかと思われます。

砂町水再生センター界隈のその後

砂町水再生センターの
 その後の変遷を追ってみ
 ました。

屎尿消化汚泥の天日乾
 燥床があった辺りには、
 砂系の水処理施設が建設
 されました。

さらに、貯木場があった
 海域は埋め立てられ、紅
 白の大煙突がそびえる多
 段式の焼却炉が建ち、そ
 の煙突の高さは一五〇メ
 ートルもありました。焼
 却炉の運転は昭和四四年
 からですが、現在、その機能は東部スラッジプラ
 ントに移行しています。

埋め立てに当たっては、周囲に松杭を打ち板囲
 いをして行いました。埋め立て土は、近くの海を
 浚渫して得た砂を使い、パイプで圧送しました。
 以前空き地であった所は、砂系の水処理施設と
 急速砂ろ過施設になっています。

荒川沿いの湿地であった所には、東部スラッジ
 プラントの遠心脱水機、流動床式焼却炉、廃熱利

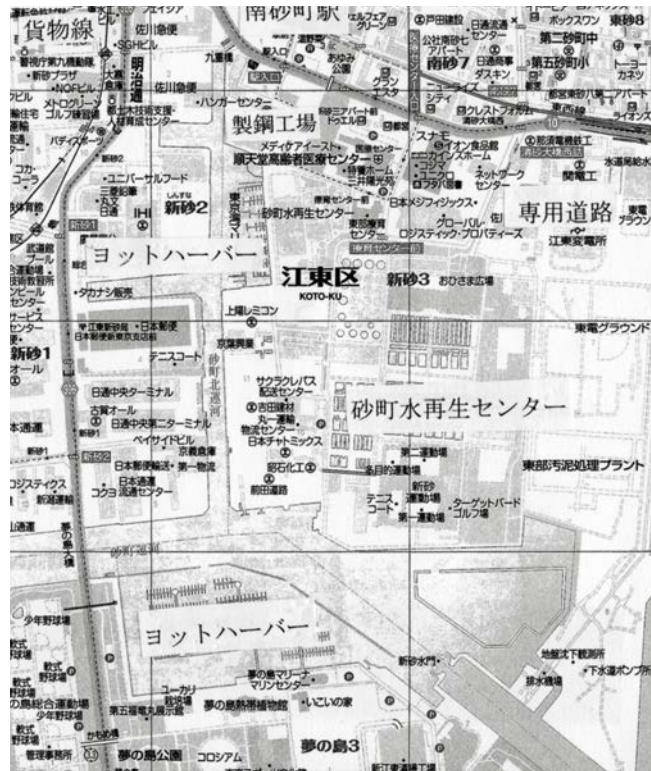


図 - 3 最近の砂町水再生センター界隈の地図

用発電施設などが建っています。消化
 槽を経ずに脱水・焼却する方式です。
 平成九年から運転を始めています。こ
 のプラントには砂町ばかりでなく、落
 合、中野、三河島、有明の各水再生セ
 ンターからの汚泥も圧送されてきます。

覆蓋され、上部が運動公
 園として利用されている東
 陽系の水処理施設の辺りは、
 以前その一部がまだ海面だ
 ったところでした。ここは昭
 和六二年に稼動しています。
 これに伴い、木場系の処理
 施設は運転休止となり、平
 成二年からは雨水貯留池に転用されています。

屎尿消化槽は撤去さ
 れ、着船場は埋め立て
 られました。その跡地
 は植栽され、現在では
 ちよっとした樹林帯へ
 と生長し緑のオアシスになっ
 ています。

専用道路の両側の海は、だい
 ぶ前にすでに埋め立てられてい
 ましたが、今ではそこに、工場、
 配送センター、倉庫、福祉施設、
 病院などが建っています。

わずかに残った海面には、ヨッ
 トハーバーが二つも立地してい



写真 - 10 製鋼工場と運河



写真 - 12 専用道路の辺り



写真 - 11 福祉施設と病院

ます。

地下鉄東西線が延伸し南砂町駅が昭和四四年に開業しましたが、この駅を出たところで地上に顔を出し荒川を鉄橋で渡りますので、車窓から砂町水再生センターが一望できるようになりました。また最近、この地下鉄と水再生センターとの間に、新たな道路が通るようになりました。かつて陸の孤島と言われた砂町水再生センターの界隈もたいへんな様変わりです。

おひさま広場と野草の小径

平成一二年三月に、砂町開設七〇周年記念の式典が野外で執り行なわれました。初期の五七年間、下水を汲み揚げ続けてきた主ポンプ棟の跡地を整備して造られた「おひさま広場」においてです。

この広場は、再生水が流れる素掘りのせせらぎや人工の滝や大池や剪定した木の枝のチップを敷いた遊歩道などからなっています。

このとき、「守ろう きれいな水」と云う下水道マンの意気込みを示した標語を刻んだ記念碑が、広場の一面に設置されました。銘板の材料は、焼却灰を高温で溶かして作った結晶化ガラスです。その周囲には焼却灰を固め焼成して作ったレンガが敷かれています。

また、砂町水再生センターには一七〇種を超える野草が自生していますが、都内でも珍しいものが多いと云うことで「野草の小径」を整備して、それらを保護しています。

このほか敷地内には資源化施設としての「汚泥炭化施設」が東部スラッジプラントのエリアに、また、技術開発のさらなる推進を図る「下水道技術研究開発センター」が焼却炉の跡地に、そしてかつて屎尿処理施設があった所に技術実習を主体とした「下水道技術実習センター」が、それぞれ併設されました。

参考文献（文中で明記したものを除く）

- 「トイレ考・屎尿考」技報堂出版
- 「江東歳時記」東京美術
- 「史跡をたずねて」江東区
- 「第12回下水文化研究発表会講演集」日本下水文化研究会
- 「下水文化研究 第10号」日本下水文化研究会

探訪余話

読売新聞の江東版に連載された（昭和三二年三月〜翌二月）『江東歳時記』は、砂町在住の俳人・石田波郷が、カメラマン同行のもと、江東地区（江東、墨田、葛飾、江戸川、足立の各区）の諸行事や風物取材した探訪記です。必ず、このとき詠んだ一句が添えられています。「小名木川駅で」と題する一節を次に紹介します。この界隈の工場地帯を支えていた貨物駅（江東区北砂）の息吹が伝わってきます。

『小名木川駅春の上潮曇るなり』

私は毎朝、小名木川駅の貨車の入換えや突放のひびきで目をさます。戦後砂町に移って十一年間そうである。もともと初めの四、五年は貨車の動きも今ほどではなかった。鉄路の堤にのびた土筆を子供と摘んだこともある。

小名木川駅の事務所二階の駅長室からながめると、さすがに江東工業地帯の要だけあって、窓前の二十トンクレーンを前景に、野天ホーム、小名木川からひきこんだ大ドック、貨物上屋などに積まれた木材、鋼材、鉱石、石炭などの重畳する彼方に、かすむばかりに引込線の堤が見え、そこだけに青草が見える。

「青いものは全くありませんね」というと、平野駅長は返辞のしようがないのか、卓上の石楠花の鉢に目をやった。

新小岩から江東線に客車が入るといいう話があつて昨年振動調査などしていたが……とぎくと、工場地帯としての立地条件の第一は足をつけること、それ

によつて他から人的資源を仰ぐことができる。この足のないことが発展をはばんでいる。この計画には鉄橋の多いことが問題だという。客車港東線は遠いことらしい。それよりも一キロ三八〇メートルの晴海埠頭ができて年間百万トン増の貨物扱いとなる、その対策研究の方が急務だそうである。

遙かな鉄塔の豆粒ほどに見えるのは松本カメラマンのようだ。』

(文責 地田)